

## 中国レポート

11013047 熊谷 航介

私は約四か月間中国の北京にある北京師範大学に留学してきました。今になって留学のことを振り返ってみると本当にあっという間だったように感じますが、留学している間は本当に毎日がとても充実していて多くのことを学べたと思います。

私が留学したいと思った理由は大きく三つありました。

一つ目は、私は海外に行ったことがなく、日本以外の文化に直接触れたことがなかったので、少しでも多くの文化に触れて自分の見識を深めたいと思ったことです。

二つ目は、私は親元を長い間離れた経験がなく、自分でもあまり自立できていなくてだらしない性格だと思っていたので、集団でとはいえ異国の地で四か月暮らすことによって少しでも自分が成長できればと思ったことです。

これだけなら別に中国でなくても良いのですが、そもそも私が中国コースを選んだ理由の一つに、日本で中国のことが必要以上に悪く言われていて、実際いくら国が違うとはいえそこまでひどいものなのかと疑問に思ったというのがあります。中国政府の政策などについての批判ならまだわかるのですが、特にネット上ではまるで中国人そのものが諸悪の根源だとでも言わんばかりに言われていて強い違和感を覚えていました。もちろん国の成り立ちも歴史も全く違う以上、確かに文化も価値観も全然違うのかもしれませんが、結局同じ感情を持った人間なのだから必要以上に壁を作る必要はないだろうと思っていました。しかし、自分は実際に中国人と接したわけではなく、メディアを通じた中国しか見たことがなかったので、自信を持ってこの主張をするために実際に中国で暮らして中国人と交流してみたいと思い、それは留学に行きたいと思う最も大きな理由になりました。

とはいえ、サークルや講義など新潟国際情報大学でやりたいことも少なからずあり、大学生活でも重要な時期であろう二年生の後期を丸ごと留学に費やすことに対して多少抵抗もありました。しかし、これからの自分の人生で海外に行くというのは、旅行ならまだしも四か月もの間留学するというのはまずないだろうと思い、行くことを決めました。

けれども中国留学が実現するまでの道のりは決して楽なものではありませんでした。両親の中国に対する印象はあまり良いものではなかったし、経済的な負担は奨学金こみでもとても重く説得には時間がかかりました。それでも自分がどうしても行きたいというのを伝えると、最終的にはそれを尊重して何とかお金なども用意してくれたのはとてもありがたく、必ずこの留学を実りの多いものにしなければならぬと思いました。

そしてとうとう留学が始まりましたが、ある意味“期待通り”初日から本当に驚くことばかりでした。まず、北京空港に着いて最初に驚いたのは、そのとてつもないスケールの大きさです。空港内の移動に列車を使うほどの巨大さに、着いてそうそう圧倒されてしまいました。空港を出ると、その日は生憎 PM2.5 が多い日で、霧がかかったように視界がかすんでいました。それを見ると、少なくとも大気汚染については決して誇張ではなかったということがわかってこれからの中国の生活について少し不安を感じました。大学までの

移動にはバスをしましたが、そこでは中国の道路の混雑具合や運転のきわどさ、何より当たり前のように鳴り響くクラクションに驚きました。後になって、実はこのクラクションが相手、特に歩行者に対して注意を促していて、むしろ鳴らさない方が危ないということがわかりましたが、最初のうちはとても恐怖を感じました。大学に着くともう時間が遅く学内のスーパーでカップラーメンなどを買い出ししましたが、そこでの店員の態度はレジ打ちの時に商品を投げるなどとても不愛想で、話としては知っていたものの実際に見るとやはり驚きました。学生寮の部屋は二人部屋の寮にしてはなかなかいい部屋でしたが、トイレとシャワーがカーテンですら仕切られずに隣り合っていたのはさすがにかなり嫌だったのを覚えています。

このように初日からカルチャーショックの連続で、その日北京では珍しい大雨に振られてびしょ濡れになったこともあり、北京に対する第一印象は良くありませんでした。しかし、実際に中国で暮らしたり中国人と接したりするうちに、確かに文化や価値観の違いを強く感じましたが、それは必ずしも悪いことではなく自然で当たり前のこと、また素晴らしいことだと思うようになりました。日本では中国の文化について悪い面が強調されていますが、物事には必ず良い側面と悪い側面があると思いました。

例えば、店員が無愛想だと初日は思ったのですが、日が経つにつれてだんだんと自然なことのように感じ、むしろ日本はあまりにも“お客様第一主義”が行き過ぎているのではないかと思うようになりました。実際、すべきことはしっかりしているし、何も困ることはありません。日本ではあまりに対応が丁寧すぎて逆にこちらのほうが緊張してしまうということもありました。もちろん100%中国の真似をすればいいわけではないのですが、もう少し自然に接客してもいいと思います。

また、スーパーやチェーン店など最初から値段が決まっているところもありますが、そうでないところでは店員との交渉で値段を決めることになります。この値段交渉でどれだけ値下げできるかなのですが、初めはまず間違いなくぼったくられます。向こうも取れるところから取らないとやっていけないので、相場を知らない外国人、特になかなか自分の主張ができず、相手の言い値にそのまま納得してしまう人が多い日本人は格好の獲物かもしれませぬ。実際、自分もまんまとぼったくられてしまいました。しかし、こうした交渉の中で中国語の会話が上達したり生の中国人との会話の雰囲気がわかったりするし、何よりお互いの利害や体裁(=自分の対応や提示した値段などの正当性が一応認められること)などがせめぎ合い、きっちりと勝敗は付きつつも表面上は和やかに取引が終了するという感じがとてもスリリングで慣れると面白いと思いました。日本でも家電量販店などで多少値引きすることはありますが、中国での値引きは値引かなければいけない金額が段違いです。

このような体験から考えると、中国ではサービスの消費者と提供者の立場が対等なのだと思います。当然、立場が対等であれば能力も対等でなければ実質的には対等にならないので、中国では賢い消費者でなければ生き残れないということになります。日本では消費

者は様々な面で保護されているような感じなので、慣れないうちは大分つらいかもしれませんが、おそらくこうした環境の中で中国人の主張の強さが磨かれていると思うし、そういった面では多少見習うべきかもしれません。

他にも、最初に思っていた生活の不満は慣れると大体大丈夫になりました。トイレとシャワーが隣り合っているけどどうとも思わなくなったし、自動車優先のきわどい交通状況にも歩行者としてうまく適応できるようになりました。

また、私が接した中国人の中で反日感情をあらわにしてくる人は全くいませんでした。ただこれは歴史問題などについて話し合えるほどの語学力がないということもあると思います。また、北京師範大学という中国でも有数の環境だからこそというのもあるかもしれません。実際、反日デモに参加するような人は貧困で教育水準が低かったりして、本来政府に向けるべき生活の怒りを日本に向けているというような人も多いと聞きます。



一方、どうしても良い面があるとは思えないこともありました。PM2.5はひどい時は本当にひどく、間違いなく急速な発展によって生じた大きな歪みだと思います。日本でも公害が問題になった時期はありましたが、中国は人口、国土など様々な面で日本より規模が大きいので、環境問題も必然的に巨大なものになっていると思います。中国政府も国際社会の目がある中でこの問題をどうにか改善させようと色々と模索しているでしょうが、まだまだ解決には長い年月が必要だと思います。また、中国の問題を通して日本の問題を改めて認識したことがあります。それは、食事を残すことです。食糧の大量廃棄は先進国を中心に問題になっていますが、私は北京師範大学の食堂で大量に捨てられている食べ物を見たり、昔中国の食事を残すことが豊かさの象徴という文化があったという話を聞いたり

して、てっきり中国が一番食糧を廃棄していると思っていましたが、食糧廃棄率が一番高いのは日本でした。日本、中国、韓国は先進国の中でも特に食糧廃棄率が高いということで、自分も気を付けないといけないと思いました。

北京師範大学での授業はどれも非常にためになりました。最初はすべて中国語で行われる授業でかなりきつかったのですが、先生方はすべて外国人に中国語を中国語で教えるプロなので、身振り手振りを使ったり簡単な中国語に言い直したりしてとてもわかりやすく、何とか授業についていくことができました。やがて、授業や課題をこなしていくうちに前にやった内容が繰り返し現れることに気づき、少しずつ楽に内容が入ってくるようになりました。この経験によって、言語の勉強は積み重ねであり基本的なことがわかれば以降のことが格段に理解しやすくなるということがわかりました。正直、私は中国コースに入った時はあまり中国語には興味がなかったのですが、留学を通して外国語がわかること、そして相手に自分の意思が通じるようになることの喜びを知りました。

中国で生活する上で、中国人をはじめとする多くの外国人たちと交流してきましたが、新潟国際情報大学以外の日本人学生とも様々な交流がありました。北京師範大学のように多くの外国人が学ぶ所では、各国ごとに〇〇人会が形成されていて、当然日本人会もあります。近年は日本人留学生の減少に伴い日本人会の人数も減ってきているようですが、それでもまだまだ活動は活発で、特に大きな取り組みとして毎年 12 月に行われる巨大イベント「北京留学生之夜」で大勢の日本人が鳴門踊りを現代的にアレンジしたダンスを踊る機会があり、留学生活でも大きな思い出の一つになりました。正直、最初に参加するときは「毎年国情生は出てるから」「日本人会にはお世話になってるから」というような感じで半強制的に嫌々やるという気持ちでしたが、ダンスを黙々と練習していく没入感、少しずつできるようになる達成感、みんなの呼吸があってくる連帯感を感じるようになり、本番の時には本当に全力で踊ったと思います。また、日本人会では飲み会の機会も多くあり、お酒が好きな自分はとても楽しかったです。日本でも飲み会はありましたが、それまで自分が経験した飲み会より明らかに飲むペースが速く、生まれて初めて二日酔いを経験することにもなりました。今となっては良い思い出ですが、本当に辛かったので今後は基本的に抑えて飲もうと思います。日本人会の人をはじめ日本人の方はみな優しく、かつ色々な人がいて、飲み会や普段の雑談などで話を聞いたりしているととても面白かったです。



ただ、今思うと少し日本人との交流の時間が外国人に比べて長かったようにも感じます。確かに、外国人と交流するためには常に頭をフル回転させる必要があったので、どうしても億劫になってしまうときもあったし、異国の地で自分と同じ国の人がいるというのはそれだけで親近感や連帯感を感じやすいところがあったと思います。しかし、せっかく中国まで来たのだからもっと多くの時間を日本人以外の人と過ごすべきだったと今になって思います。ただし、ここでいう“親近感”とは、日本にいるときに日本人に感じるものとは似ているようで少し違うように思います。なぜなら、日本にいるときは周りに日本人がいることが当たり前ですが、外国では自分たちこそが“外国人”として見られることになる圧倒的少数派です。そこでは自分たちも様々な集団の中の一つでしかないという謙虚な気持ちが生まれたり、自分たちのアイデンティティをより強く意識して客観的に見ることができたりすると思います。

中国留学が終わった今、当初の目的をどれだけ達成できたかを考えてみると、上手くいったところとそうでないところがあります。

中国の文化に触れて自分の世界観は少し広がったと思うし、メディアを通してはわからない中国人の姿が垣間見えたと思います。しかし、自立した生活が送れるようになったということは全くありませんでした。留学先でもいろいろな人に迷惑をかけてしまったし、今でもだらしのない性格は変わっていません。引き続き努力していきたいと思います。また、せっかく中国語が少しわかるようになったので、日本でもこれを維持できるように頑張って勉強していきたいと思います。

